

〔論説〕

危機のなかの古典

——コロナ禍に「ヨブ記」を読む——

與那覇潤

一

とてつもない理不尽が社会を覆っている。

二〇二〇年三月から全世界的なものとなった新型コロナウイルス禍は、一年以上経ったいまも混乱の収拾に至っていない。当初の被害は甚大だったものの、ワクチンの普及により収束傾向が鮮明になっているイギリスのような国もあれば、長く影響軽微だったにもかかわらず、二一年三月に最大級の感染爆発を起こしたインドの例もある。

こうした情勢下では、どこかひとつの国を取り上げて「必ずこうなる」「このやり方に倣え」と論じる発想は、有害無益でありまったく意味がない。虚心坦懐に、表面的な類似ではなく各国の実績の背景にある構造的な相違に目を向け、自らの知性を働かせて自国の問題を解いてゆくより他はないのだが、そうした実践を目にすることはずっと稀だった。

自然免疫や訓練免疫の違いを無視して「欧米で大被害が出たなら、日本も必ずそうなる」と誇大に危機を煽ったかと思うや、続いては地勢や人口の条件がまるで異なる小国を引き合いに出して「理想は台湾でありニュージーランドだ。同じ政策を採れ」と主張する。そうした次元の低い議論の果てに、いまや人文学的な知の信用自体が失墜したとあってよい状態だ。

否、人文学だけではない。信頼性の喪失は、自然科学にも及ぶ。

二〇二一年一月からの二度目の緊急事態宣言は、内容が飲食店の時短営業にほぼ絞られたが、それを正当化する根拠は何も示されず「憶測」のみであった。同年四月からの三度目の宣言では、突如対象が百貨店の休業などにまで拡大されて国民を驚かせたが、政府自身が当初から「エビデンスはない」と認める次第となっている。

ここで起きている事態の本質を、私は二〇二〇年の年末に「数字による、意味の虐殺」と表現した。たとえば仮に、ある人がコロナ対策としての自粛や休業の要請によって、その職を失ったとしよう。

このときもし、それはつらいことだけれども何がしかの意味がある犠牲であったと、そのように本人が自分を納得させられるなら、それは苦境を乗り切るうえで貴重な糧となるだろう。国民に負担を強いる政策判断に、エビデンスの提示が求められるのは、単なる自然科学の研究マナーに沿ったものではない。人間がパンのみでなく、意味をも食べて生きる存在であるからこそ、人を導く役割に立つ者は、意味への配慮をけっして欠かしてはならない。

それがどうだろうか。政府高官やそれを支える科学者が、目下の対策には根拠がないと公言する——「感染の抑止に際して、意味があるかはわからないけど、とりあえず犠牲になってください」といった態度を示して恥じない状態だ。その代償になにが得られているのかといえば、たかだか「新規の陽性者が何人になりました」といった程度の、いまや多くの人々が日々のニュースで聞き流す数字に過ぎない。

むろん、政府の施策を批判する識者も多い。しかし、彼らのほとんどが唱えるのもまた、強硬派なら「ロックダウンしてもっと陽性者数を下げろ」、穏健派でも「補償する金額を引き上げろ」といった数字の話ばかりだ。

解雇や廃業にまで至らずとも、それぞれに意味を込めて営んできたコロナ以前の日常の実践を、否定された人がどれほど大きな喪失感を抱えているか。そのことに向きあい、なんらかの形でせめてもの意味を新たに充填しようとする、配慮に満ちた実践がこの国ではあまりにも少なすぎる。